

『BOX』 作・永妻 優一

上演台本・永妻 晃

ヒロセ

オトコ

あるバー。

テーブルを挟んでヒロセとオトコが座っている。

テーブルの上には手のひらサイズの箱が置いてある。

美しく印象的な箱……。

ヒロセ、何かの始まりでもあるかのように激しく手を叩く。

しかし、オトコに動揺はない。

ヒロセ
蚊です。

オトコ
蚊？

ヒロセ
そう、蚊。

オトコ
夏、ですからね。

オトコ
オトコ、改めて店の中を見回す。

オトコ
いいお店ですね。

ヒロセ
まずはご機嫌取りですか？

オトコ
まさか。

ヒロセ
評判は悪くありません。

オトコ
他にも店を経営されている。

ヒロセ
ええ。

オトコ
なるほど。

ヒロセ
なるほど？

オトコ
実にいい家でした。それで……どうするおつもりですか？ 俺を。

ヒロセ
言ったでしょ？ チャンスをあげるって。

オトコ
確かに聞きました。

ヒロセ
普通、あなたみたいな人にチャンスなんて……。

オトコ
俺みたいな……。

ヒロセ
悪い人間。

オトコ
そうね……しかし、こんなことは初めてです。

ヒロセ
……では、本題に入ります。

オトコ
本題？

ヒロセ
チャンス……それとも放棄しますか？

オトコ
お受けします。

ヒロセ
今から私がする質問に答えてください。

オトコ
質問？

ヒロセ
これは、なんですか？

ヒロセ
ヒロセ、箱を指す。

オトコ
(箱と答えようとするが)

ヒロセ
(それを遮って) もし、私の質問に一度でも間違えたら、その時点であなたはチャン

スを失います。

オトコ これが？

ヒロセ よく、考えてみてください。

オトコ、箱をじっくり見つめる。

オトコ (慎重に言葉を選びだすように) ……箱、です。問。

ヒロセ ……正解。おめでとう。

オトコ ……まさか、これで釈放ですか？

ヒロセ (言葉を強調するように) まさか……次が最後の質問です。

オトコ ほう、行き成り最後の質問ですか？

ヒロセ この質問に答えてくれたら、あの出来事はすべてなかったことにします。

オトコ あなた、何がしたいんですか？

ヒロセ 質問するのは私です。

オトコ ……。

ヒロセ 放棄しますか？

オトコ ……続けてください。

ヒロセ では……箱の中身は、なんですか？

オトコ ……え？

ヒロセ 箱の中身です。二度も言わせないでください。

オトコ ……。

ヒロセ ひとつ言い忘れていました。タイムリミットがあります。

オトコ ……。

ヒロセ 閉の店時間まで……(腕の時計を見て) 後、三十分。

オトコ 触るのは？

ヒロセ 禁止です。

オトコ (箱を見つめ) ……うーん、何とも難しい。

ヒロセ、カクテルを一口。

ヒロセ 赤の他人の……。

オトコ、顔を上げる。

ヒロセ 赤の他人の家の前にいる時ってどんな気分がするものなんですか？

オトコもカクテルを一口。

オトコ ヒロセさん。

ヒロセ ……知り合いのように呼ぶのはやめてください。

オトコ しかし他に呼びようがないでしょう？

ヒロセ たかが三十分の関係です。

オトコ なるほど。

オトコ、しばらく箱を見つめていたが、

オトコ お聞きしてもよろしいですか？

ヒロセ、じっとオトコを見つめて、

ヒロセ 何です？

オトコ ……透視できる人間でも捜しているんですか？

ヒロセ いるんですか、そんな人間？

オトコ いくちや正解できないでしょう？

ヒロセ (無視して) 正解がわかったら教えてください(と、小説を取り出し)

ヒロセ、小説を読み始める。

オトコ、箱に目を向け、いろんな角度で眺めていたがケータイを開く。

諦めたんですか？

オトコ いえ、話のタネに一枚……。

オトコ、ケータイで箱を撮る。

オトコ 携帯に透しの機能が付いていればね……一つわかったことがあります。匂いがしないので、ナマモノなどではない。

ヒロセ、再び小説に。

オトコ なんてこんなことになったんですかね。俺の仕事情。それなりの覚悟はしているんです、失敗した場合の覚悟を、です。だけど、こんなことになる覚悟はしていませんでした。ただの一度も。

ヒロセ 別に構いませんよ、すぐに通報したって。

オトコ、沈黙。

オトコ (きっぱりと) すいません。勘弁して下さい！

ヒロセ (きっぱりと) 出来ません。

オトコ 子供が居るんです。

ヒロセ へー？

オトコ 意外ですか？

ヒロセ 子供がいるのに、あんなことを？

オトコ 父子家庭なんです。

ヒロセ、一瞬オトコを見つめる。

ヒロセ ……盗んだ金で、子供を食わせてるんですか？

オトコ そう言われると胸が痛いです。

ヒロセ あなたに似なかったんでしょね。

オトコ 見ますか、ほら。(と、ケータイをヒロセの前に)

ヒロセ、反射的に携帯に目をやる。

オトコ 上の子が五歳、下の子は四歳です。

ヒロセ、じつと兄弟の写真を見る。

オトコ なんです？

ヒロセ、小説に視線を戻す。

問

オトコ ……想像をするんです。家を眺めて、この家にはどんな人間が住んでいるのか……

外壁から、その雰囲気から……どんな家族がいて、そこにはどんな会話があるんだろうって。

ヒロセ ……。

オトコ そしてある想像が出来た家にだけ入ります。なるべく盗っても心が痛まない家から盗るようにしたいんです。世の中キレイな人間ばかりじゃありません、キレイな金ばか

りじゃありません。

ヒロセ、オトコを睨む。

オトコ いえ、あなたは違た、外しました。だからこうして罰を受けてる……でもね、ヒロセさん。家というものはね、注意深く観察して、想像すれば。

ヒロセ ……私の家には、どんな人間が住んでいたって言うの、あなたの想像の世界では？

オトコ ……。

オトコ、カクテルを空になる。

ヒロセ おかわりは？

オトコ いえ、結構です。……一人で住んでいらつしやるんですね。あの立派な一軒家に。

ヒロセ どうして一人だと？

オトコ あなたしかいなかった。

ヒロセ あなたが忍び込んだ時間にはね。

オトコ 写真もなかった。大抵あるんですよ。一緒に住んでいる家族の写真なんか。どんな家にも、一枚や二枚。

ヒロセ ……。

オトコ どうしてインターホンに応じなかったんです？ もし返事があればあなたの家には忍び込まなかったし、こんなところに呼び出されずにも済んだ。とんだミスを仕出かしたものです。空き巣に入った家に財布を落としてくるなんて。

ヒロセ そっくりだった。

オトコ はあ？

ヒロセ あなたの免許書の写真……弟に。しかも会ってみてますます似ているんでさらに驚き。緊張感がないところ、よく喋るところ、女性にだらしないところ。

オトコ 女にだらしないって？

ヒロセ そうでしょ。だから奥さん逃げて行ったのよ。

間

オトコ ……で、今、弟さんは？

ヒロセ 五年前に縁を切った。あなたのような人間になっっているかも。

オトコ、腕時計を見て改めて箱を見つめる。

ヒロセ どんなに見つめても。絶対にわからない。人の心の中が誰にも覗けないみたいだね。

オトコ 確かに心は覗けません、想像することは出来ます。

ヒロセ 家の中を想像するみたいに？

オトコ (きつぱりと) この箱の中身は、あなたのお弟さんと関係がある物、ですよ。

ヒロセ ……。

オトコ だってあなた、ご自分の弟さんと俺を重ね合わせたからわざわざこんなことをしているんだ。そうでしょう？ でなくちゃ、あなたはとつくに警察に通報してる。

間

ヒロセ ……私の家も父子家庭。まずしくて、住居も小さなアパート。買ってもらえる玩具はいつもひとつ……それも弟にだけ。私は弟が飽きて捨てたお古ばかり……ドアが壊れた黄色のミニカー。色の褪せたウルトラマン。傷ついたスーパボール。

ヒロセの口は動いているがサイレントでお客には聞こえない。

ヒロセ ……でも私にはどれも大切な宝物だった……。

ヒロセ、オトコを睨み。

ヒロセ 試しにどれか言ってみたら……でもチャンスは一度だけだ。外せばその時点で通報します。

オトコ ……。

ヒロセ どうしたの？ 弟からもらったものだと思ったんでしょ？ 私は弟からもらったものを正確に言った。入っているかもよ。どれかの品が……。もし、縁を切った人間からもらったものを、今でも大事にしているとしたらね。

オトコ ……。

ヒロセ ……どうしたの？

オトコ (ヒロセを見て) なんのためにこんなことをしているんです？

ヒロセ 覗いてみたら、私の心の中を……。

オトコ いいんですね。

ヒロセ どうぞ！

オトコ わかるんですよ、俺には……言ったでしょ？ 滲んでるんです、外壁から、中身が。だったら、この箱の中身を当てて、あなたの透視眼を証明してみたら。

間

オトコ (につこり笑って) そのつもりです……。

間

オトコ 店には置かないんですね。

ヒロセ 何を？

オトコ レコードです。あなたはあの日聴いていた。インターホンに気づかないくらい夢中で。

ヒロセ ……。

オトコ ドアーズですね？ いい趣味だ。それにしても随分小さなボリュームで聴くんですね。

ヒロセ ……。

オトコ あんなに閑静な住宅街だ。立派な家だ。防音だっけしっかりしてる。アパートじゃあるまいし、隣人に気を遣う必要はまったくない。そうでしょう？

ヒロセ ……。

オトコ レコードはお好きですか？

ヒロセ もちろん。

オトコ だけど店には置かないんですね。

ヒロセ この店のコンセプトに合わないの。

オトコ 本当に？

ヒロセ ……何が言いたいの？

オトコ あなた自身はさほどレコードにこだわりがあるわけじゃないんでしょ？

ヒロセ 私は……。

オトコ あのレコードプレイヤーはあなたの趣味であなたが購入したものじゃない。昔からある物なんじゃないですか、狭いアパートで暮らしていた頃からの？

ヒロセ そうやっていろいろ想像するの、外壁を眺めながら？

オトコ 心地いいですか？

ヒロセ ……。

オトコ アパート時代に聴いていたであろうボリュームがです。弟さんと二人で聴いていたん

じゃないですか？ 隣の部屋に気を遣いながら小さなボリュームで……玩具は中古でも、音楽は弟さんと唯一共有できるもの。

ヒロセ じゃあなに、この箱の中にはレコードプレイヤーが入っているとでも言うの？

オトコ ……無理でしょうね。

ヒロセ 話にならない。

オトコ ……確かに。……でも、あなたは弟さんを待っている。

ヒロセ バカな、あんな考えなしの人間をどうして私が……。

オトコ (笑い) 何言ってるんですか？

ヒロセ ？

オトコ お話ではあなたは他にも同じようなお店をお持ちとか……。しかしあなたは毎日ここにいます。この店は昔からここにある。そしてここであなたはずっと弟さんを待っているんです。今にでもふらっと弟さんが入ってくるかもしれない……この箱の中身を当てさせる相手を間違えてはいませんか？

ヒロセ ……そうやって、私を丸め込もうとする？

オトコ え？

ヒロセ 何も考えずに喋っているんでしょう？

オトコ ヒロセさん？

ヒロセ 何も考えずに……、

回想

オトウトと話した最後の日へ時間が飛ぶ。

オトウト (遮って) 考えてるよ。

ヒロセ ……。

オトウト 考えてるよ、俺はちゃんと。

ヒロセ ……じゃあなんでそんな結論になるのよ。

オトウト なんてってなんだよ。

ヒロセ この店手放すって。ここは父さんの店よ。

オトウト 父さんは死んだよ。今は俺たちの店だ。

ヒロセ アンタはろくに手伝いにもこないで……。

オトウト 売上伸びてないんだろ？

ヒロセ 少し内装を変えようと思ってる。

オトウト また金がかかる。

ヒロセ だけどそれでこの店は息を吹き返す。

オトウト なあ、父さんにこだわるなよ。この店は店であって父さんじゃなんだぞ？

ヒロセ 父さんが唯一残してくれたものよ？

オトウト それで姉さんが身を潰したら父さんだって浮かばれないだろ？

ヒロセ この店潰したらそれこそ浮かばれない。

オトウト 違う。

ヒロセ 違うない。

オトウト ……売ろう、ここは。それが俺たちのためだ。

ヒロセ ろくに考えもせず。

オトウト 考えたよ。

ヒロセ 考えてない。あんたは昔からそうだ。

オトウト 落ち着けよ。

ヒロセ どうせ金が必要なだけなんでしょ？ また女でしょ？

オトウト 落ち着けて。

ヒロセ どうしてわかんないのよ。父さんが私たちを育ててくれた店よ。この店がなかったら
私たちは、

オトウト じゃあ姉さん好きだったか？ あのポロアパート。四角い箱みたいな味気ないあの
ワンルームのポロアパートが。この店手放さないと姉さんは抜け出せないぞ。あそこ
から。

ヒロセ 箱？ ふざけないですよ。確かに狭かった、汚かったよ。でも中身があった。ちゃん
と中身があったでしょ、あのアパートには！

オトウト 中身？ なんだよ、中身って。

ヒロセ アンタにはわかんないよ。

オトウト ああ、そうだな。俺にはわかんねえ。

ヒロセ また考えもせずに。

オトウト 俺は考えてるよ、ちゃんと。

ヒロセ だったらなんでわかんないのよ。

オトウト わかんねえよ、血が繋がってるっていったって、俺は姉さんじゃないんだからよ。

ヒロセ それはアンタがちゃんと私や父さんの立場になって考えてないせいよ。

オトウト 堅いんだよ、笑えよもつと。笑えるように生きろよ。

ヒロセ 俺はあんたみたくお気楽な人間じゃないんだよ。

オトウト そうか、わかった。じゃあ好きにしろ。

ヒロセ 私はこの店の売上を伸ばして、でっかい家を建てるよ。

オトウト アホか、無理だよ、そんなこと。

ヒロセ まったくわかってもらえなんだね、私の気持ちを。

オトウト 姉さんだって覗けないだろ？ 俺の心の中を。

再び時間は現在へ。

ヒロセ 無理じゃないよ、アンタにはわかんないだけよ。

オトコ ヒロセさん？

ヒロセ 違う、わかんないんじゃない。考えようともしない、だから、

オトコ ヒロセさん。

ヒロセ ……。

オトコ 大丈夫ですか？

ヒロセ (我に還り) 私……。

オトコ ……。

ヒロセ 私……、今……。

オトコ ヒロセさん。

ヒロセ 当てるみて。

オトコ はい？

ヒロセ 想像できるんでしょう？ 私の心の中が……あなたそう言った。じゃあ当ててみて……
ください。

オトコ ……。
ヒロセ ……。

ヒロセ、改めて箱をオトコの前へ。
間。

オトコ、箱を見つめ。

オトコ あなたはこの店で成功した。確かに立派な家だ。でも、あなたは弟さんの気持ちをちゃんと考えようとしたんですか？ あなたにだって見えていないものがあるんじゃないですか？

ヒロセ 何を言ってるの？

オトコ 俺はこの箱に、あなたの家を見た時と同じものを感じているんです。

ヒロセ ……言ってみて。

オトコ、ヒロセをじつと見つめ。

オトコ からっぽです。

ヒロセ ……なんて？

オトコ この箱の中身は、からっぽです。

ヒロセ ……。

オトコ これが俺の答えです。

ヒロセ ……からっぽ？

オトコ ええ。あなたの家と同様に。

ヒロセ 私の家？

オトコ 中身がない。そうでしょ？

ヒロセ 中身？

オトコ 今のあなたにはわからないかもしれない。

ヒロセ (箱を見つめ)。

オトコ どうしたんです？ 箱を開けないんですか？ 答え合わせをしましょうよ。

ヒロセ どういうおつもり？

オトコ なにがです？

ヒロセ からっぽなわけがないじゃない！ いい、あなたの人生がかかっているのよ？

オトコ いえ、断言出来ません。その箱はからっぽです。

ヒロセ じゃあ私はからっぽの箱を用意して、あなたに中身をあてさせようとしていたっていうの？

オトコ そうです。

ヒロセ 馬鹿げてる！

オトコ 馬鹿げてはいません。

ヒロセ いいの？ その答えで。後悔するよ！

オトコ しません。

ヒロセ そう。

ヒロセ、箱を開けようとする。

オトコがじつと見つめている。

ヒロセ、開けることができない。

ヒロセ もう一度、答えを変えて。これはからっぽじゃない！

オトコ 答えていいのは一度だけなんでしょ？

ヒロセ ルールを変えます。もう一度チャンスをあげる。

オトコ チャンスを頂いても俺の答えは変わりません。

ヒロセ もう一度考えた方がいい。これは本当に……。

オトコ (遮り) いえ、からっぽです。

ヒロセ ……。

オトコ よく見て。(箱を手に取りオトコの前に差し出す) よく、見てください。

ヒロセ、箱を見つめる。

オトコ 今度はあなたが想像する番だ。

ヒロセ、箱を見つめている。

問。

オトコ 返していただけますね、俺の……。

ヒロセ、財布をテーブルに置く。

オトコ どうも。

オトコ、財布からお札を取り出す。

ヒロセ なんです？

オトコ カクテル代。

ヒロセ ……結構です。

オトコ、ヒロセに声をかけようとするが、言葉が見つからず、立ち上がる。

オトコ ごちそうさまです。

と、去りかけた時。

ヒロセ 大した空き巣ね。

オトコ、振り返る。

ヒロセ 箱も開けずに、中身を当てる。

オトコ、少し笑い、頭を下げて出て行く。

ヒロセ、しばらく箱を見つめるが……手に取り箱を開ける。

中からは、レコードの針(カートリッジ)が出てくる。

テーブルに、まるでそこにレコードがあるように針を落とす。

擦り切れたドアーズの曲が流れる。

オトウト(オトコ)が店に入ってくる。

ヒロセ、弟を見つめる。

オトウト(オトコ) 姉さん！

微笑むヒロセ、再会の言葉を捜そうとする。

オトコ ……すいません、忘れ物を。

オトコ、椅子に忘れていったケータイを拾う。

ヒロセ、オトコに微笑む。

オトコ ……どうしたんですか？

ヒロセ ……いいえ。

おしまい。